

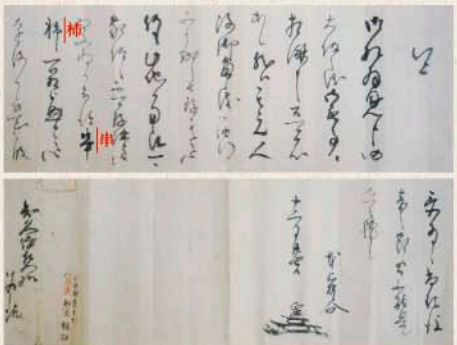
干柿生産が さかんになった江戸時代

【柿は年貢として納められた】

飯田・下伊那地域では
立石柿の生産がさかんに

鎌倉時代以降の土豪で、戦国時代には飯田・下伊那東部の地を領地として治めていた知久氏。知久則直は、関ヶ原の戦いで徳川家康軍に参陣し、旗本信濃衆として三千石を与えられました。その則直が大坂冬の陣（一六四四）の際に陣中見舞いを贈ったとされる武將、本多上野介正純、成瀬隼人正成、土井大炊頭利勝、酒井雅楽頭忠世らの礼状が史料として残されています。本多上野介正純からの礼状には「吾音信 串柿二箱被懸御意候 遠路御懇志之段忝存候」と、「串柿二箱」とはつきり書かれています。江戸時代に入ると、飯田・下伊那地域での串柿の生産はさかんになり、生産量はますます増えていきました。

江戸時代半ばに編纂された「本朝食鑑」では、巻之四菓部の柿の項目で生柿とともに乾柿についても紹介されています。尾州（尾張国、現在の愛知県西部）、濃州（美濃国、現在の岐阜県南部）、芸州（安芸国、現在の広島県西部）など各地の乾柿についての説明につづき、「また信州の立石に小串柿というのがある。：（略）：味が浅く、稍佳いものである」とあります。この「立石の小串柿」とは、飯田市三穂地域で生産されていた立石柿のことです。



本多上野介正純から知久則直に届いた串柿の礼状（番木村歴史民俗資料館所蔵）

皮をむいた渋柿を串に差して乾燥させていたので、串柿と呼ばれていました。

柿を年貢として納めた柿相米

江戸時代の年貢は米で納めるのが一般的でしたが、飯田・下伊那地域では、穀類の次に干柿による収入が多かったこともあり、小物成（雑税）として干柿にも年貢がかけられていました。

大島山村、吉田村（ともに現在の高森町）にも、元和三年（一六二七）に飯田城主となつた脇坂安元が、明暦二年（一六五六）に柿改を行った記録が残っています。

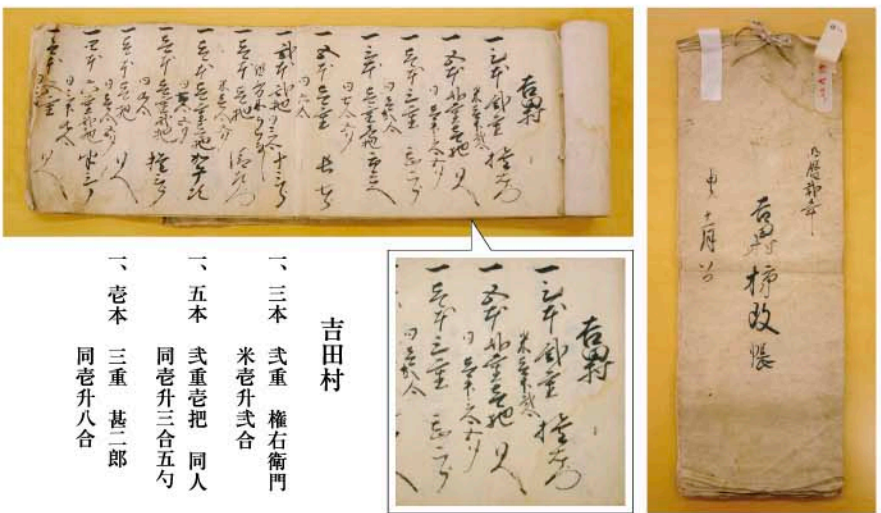
「大島山村柿改野帳」には、大島山村には三百二十七本の柿の木があり、そのうち生年の木は百八十八本、休年の木は百三十九本で、干柿の収量は二百三十七重二把といった内容が記されています。

柿に課される貢租は柿相米と呼ばれました。江戸時代前期の年貢徴収は、その年の収穫量を見込んで年貢率を決める検見法が主流で、柿相米も同様に、明暦二年の数値を基準に成木と休木の木数によって年貢が決められていたようです。吉田村の柿改帳を見ると、串柿二重（干柿四百個分）に玄

米六合の割合で年貢が課せられていたことが明記されています。柿の木の本数によって年貢を課す方式は他国でもみられました。その後、江戸時代後期には、過去数年間の収穫量の平均から年貢率を決める定免法が採用されるようになり、干柿も米と同様に、その年の収穫高と無関係に柿相米が定められるようになっていきました。

江戸時代には、現金収入を得やすい換金作物として、干柿を作る農家が増えていきました。「桃栗三年柿八年」といいますが、柿を種から育てると収穫できるまでに時間がかかることから、すでに接ぎ木栽培が始まっていたようです。寛政から文化年間にかけて（一八〇〇年初頭）柿の生産量が記録されている大島山大洞氏の「蕪貫目諸作物覚」によると、串柿の収量は四十七〜百八十九重とバラつきがあるものの平均では八十重以上になり、価格も一両につき五十〜六十重と安定しているのがわかります。

飛躍的にのびた
生産量と価格



吉田村柿改帳。明暦2（1656）年に行われた柿改の記録が残されている（高森町吉田区所蔵）

江戸時代初期
明暦年間（一六五〇年頃）には
大島山村全体の
串柿の収量が約
二百三十七重（前
ページ参照）だっ
たことと比較し
ても、生産量の
飛躍的向上は明
らかです。

大島山大洞氏の『蕪貫目諸作物覚』

収穫年	収量(重)	価格(1両あたりの重数)
寛政12(1800)年	47.0	48
享和元(1801)年	75.5	43
享和3(1803)年	189.0	65
文化2(1805)年	47.5	37
文化4(1807)年	78.5	73

(高森町史より作成)

なるほど!! 市田柿②
干柿の産地はどこ?

柿は、北海道と沖縄をのぞく全国で栽培されています。飯田・下伊那地域は甘柿栽培の北限地で、寒さに強い渋柿は東北地方でも栽培されています。干柿の生産量、出荷量ともに多いのは長野県、福島県、山梨県です。市田柿は日本で出荷される干柿の約二十九%を占めています。

干柿の出荷量（平成17年産 農林水産省特産果樹生産動態等調査より作成）

